

---

## 「臨床宗教師」運動と宗教系大学

---

弓山 達也<sup>1</sup>

臨床現場でこころのケアを担う宗教者の育成を目指す臨床宗教師研修（東北大学大学院実践宗教学寄附講座）に対して、今、各地の宗教系大学が自校カリキュラムとの連携を模索している。しかし、二の足を踏む大学もあり、一つのムーブメントとなりつつある、この動向の課題とは何かを探る。

---

<sup>1</sup> ゆみやまたつや：大正大学人間学部・教授

## 1. 「臨床宗教師」運動

### (1) 運動としての「臨床宗教師」

近年、医療や看護、街づくりやコミュニティの復興などの公共の場面で、宗教者の活動・役割に注目が集まっている。2010年のNHKをはじめとする「無縁社会」報道では、宗教者は孤独に苛まれる現代人に「縁」（支縁）を結ぶ者としてクローズアップされた。そして2011年3月11日の東日本大震災以降は、慰霊・追悼だけではなく遺族への寄り添いを通してこころの癒しの担い手として、また、まつりなどの地域行事を通してのエンパワーメントの発信者として、宗教者の役割が注目されてきた。

社会分化・専門化の進行する中、宗教者の役割が徐々に切り縮められてきたのは必然的なことである。宗教は公共に対して私事であり、個人の内面・魂に限定的に関わるものとされた。しかしその内面・魂の関わりの重要性が人間を丸ごとでとらえる際に無視することができないことは、1998年の世界保健機関（WHO）の「健康」定義の見直し議論で“spiritual”にスポットが当てられたことからもうかがえよう。そしてこの議論と相前後して、わが国において臨床パストラルケア教育研修センター（現NPO法人臨床パストラル教育研究センター）がワルデマール・キッペス神父によって九州・久留米に設立された。2002年には後述のように高野山真言宗のスピリチュアルケア・ワーカー養成講習会が発足し、2006年には高野山大学でスピリチュアルケア学科が開設された。いずれも宗教者の持つ働きが病院や学校などの臨床現場に活用されることを想定しての教育・研究機関である。

同時に2007年にはスピリチュアルケアに関わる研究者・実践者によって日本スピリチュアルケア学会が設立され、2012年からはプログラムの認定を通じて、スピリチュアルケア師の資格認定を行っている。先行するトレーニングや宗教伝統の違いなど克服すべき課題は多いが、宗教者が医師や看護師とともに臨床の場で協働できる路が拓けつつある。

同じ2012年4月、死期が迫った患者や遺族へのこころのケアを行う宗教者である臨床宗教師の養成などを目指す「実践宗教学寄附講座」が、

東北大学大学院に設置された。「仏教、神道、キリスト教などの団体の寄付を受け、3年間開講する。死に関係した宗教的な心のケアを専門的に扱う講座は国立大では初めて」と新聞報道（読売新聞2012年4月5日）は伝える。本講座は、東日本大震災後、牧師や僧侶らが中心となって設立された「心の相談室」をもとに、「既存の宗教教団に所属する宗教者を対象に、傾聴やスピリチュアルケアのスキル、公共的空間で活動するために必要な方法や知識を身につける研修を実施してきた」（高橋2014; 45-46）。

宗教者が担ってきたころのケアは対機説法のように個別的であり、時にノンバーバルであり、制度の俎上に乗りづらい。そしてそれを支える宗教者の宗教性なりスピリチュアリティなりも非制度的・個人的な性格を特徴とする。しかし臨床宗教師の技術や資質を評価して、資格を与えなければならないとすると、プログラムの標準化や育成のマニュアル作りは避けて通ることができない。もっとも同講座は期限付きで設置されているため、資格認定を行わず、講義や演習や研修を提供するに留まっている。しかし同時に臨床宗教師という発想に共鳴して、これと連携しつつ、自校カリキュラムを編成しようとしている大学も登場してきている。ほとんどは宗教系大学で、設立教団の子弟教育カリキュラムを擁しており、既存の基本カリキュラムに加え、臨床宗教師研修を応用カリキュラムとして活用しようとする試みである。龍谷大学、高野山大学、鶴見大学、種智院大学はそうした大学であり、この他にも臨床宗教師研修を検討している大学も少なくない<sup>(1)</sup>。

一方で臨床宗教師の地方部会も発足し、研修を終えた宗教者の横の連携やフォローアップの体制もできつつあり、東北大学の実践宗教学寄附講座を核に、また次項で述べる臨床仏教研究所が主催する臨床仏教師と合わせて「臨床宗教師」運動ともいべきムーブメントが形成されつつある。同講座主任の鈴木岩弓東北大学教授は「社会のあり方に対する一つの運動体」「宗教者が宗教を表に出して言えるようになってきた」「宗教の現状に風穴を開ける」という意味で「ソーシャル・ムーブメント」という（鈴木2014; 57-59）。本稿は、この中でも臨床宗教師育成事業を

開始したばかりの鶴見大学の事例を中心に、宗教系大学において本講座を活用する際に生じる課題を見ていきたい。つまり大学のカリキュラムと子弟教育カリキュラムとの並存、そしてそもそもカリキュラムに馴染みづらいスピリチュアリティをどう育んでいくのかという課題について、取り組みを始めたからこそ、浮上してきた諸点を整理できると考えたからである。

## (2) 臨床宗教師研修の内容

ここで本講座の内容を第5回研修（2014年5月20日～22日、6月24日～25日、7月29日～30日）に見てみよう（『東北大学実践宗教学寄附講座ニュースレター』6、2014）。

表1 第5回臨床宗教師研修一覧

講義	臨床宗教師の理念（30分）、臨床宗教師の倫理（60分）、スピリチュアルケア（60分）、グリーンケア（90分）、カフェ・デ・モンク（60分）、放射能の影響（60分）、会話記録の作成法（30分）、公共性の確保（60分）、在宅緩和ケア、臨床宗教師の社会実装（30分）、民間信仰論（90分）、宗教的ケア（60分）、地域と文化（60分）、人権擁護（60分）、宗教間対話（60分）、実践宗教学（60分）、健康保険と医療（90分）、実習先説明（120分）
ワークブック	死の経験（50分）、実習振り返り（50分×5）、ロールプレイ（90分×2）、会話記録（90分×4）、研修振り返り（50分×4）
実習	傾聴実習（カフェ・デ・モンク240分）、追悼巡礼（150分+90分）、日常儀礼（15分×12）、傾聴実習（各地480分×3）

会場となったのは、東北大学の他、石巻市・仙台市の寺院などで、実習は岡部医院、カフェ・デ・モンク、仙台食品放射能測定所、電話相談、沼口医院、光ヶ丘スペルマン病院ホスピス、佼成病院ビハーラ病棟、ビハーラ21関連施設群、長岡西病院ビハーラ病棟、ささえ愛よろずケアタウン、松阪市民病院緩和ケア病棟であった。修了者は19名、年齢は24歳から71歳で平均年齢は45歳という。岡部医院は、臨床宗教師を英語の「チ

ャプレンchaplain」の訳語として考案した故岡部健医師が院長を務めた病院であり、カフェ・デ・モンクは、僧侶が東日本大震災の被災地を巡る移動傾聴喫茶で、同講座の学外委員長の金田諦應通大寺住職が立ち上げたものである。

前述の通り、同講座は臨床宗教師の資格を認定するものではない。この研修を終えても研修修了者となるだけである。一方、(公財)全国青少年教化協議会の附置研究所である臨床仏教研究所が主催する臨床仏教師養成プログラムでは座学15時間(90分講演×10回)<sup>②</sup>とワークショップ40時間(4時間×10回)と臨床実習(100時間以上)を経て「臨床仏教師」資格を認定する。

同プログラムはキリスト者が主に進めてきた臨床牧会教育プログラム、仏教チャプレンシープログラム、台湾における臨床仏教宗教師養成プログラムを参考に、現代人の生・老・病・死にまつわる諸問題に対応できる仏教チャプレンの育成を目指している。同研究所の神仁上席研究員<sup>③</sup>によると、2013年5月から始まった第一期生約90名のうち7～8割が僧侶で、あとは主に寺院家族を含む仏教関係者だという。座学終了時に小論文2本を提出し、ワークショップに進んだのは39名。この終了時には筆記試験とロールプレイの実技が課され、2014年6月から始まった実践研修には8名が携わっている。臨床実習を終えた実習生は、小論文を提出して最終考査に臨む。考査の資料となるのは小論文に加えて、実習日誌、実習先から提出される実習評価表になる。これらの資料をもとに各30分の面接が行われ、認定の可否判定となる。

これまで述べた臨床宗教師、スピリチュアルケア師、臨床仏教師は、排他的に活動を行っているのではなく、人的にも交流があり、また例えば臨床宗教師研修は日本スピリチュアルケア学会認定プログラムとなっているなど、制度的にも相互に連携をとっている。ここにさらに宗教系大学の既存の子弟教育カリキュラムがどう結びついてくるかによって、「臨床宗教師」運動の広がりや深さ、そして社会的認知度が変わってくるに違いない。

## 2. 大学側の連携カリキュラム

ここでは龍谷大学と高野山大学が東北大学の臨床宗教師研修とどう関連しているのかを見てみよう。

### (1) 龍谷大学

龍谷大学大学院がそれまでの文学研究科真宗学専攻とは別に実践真宗学研究科を開設させたのは2009年である。龍谷大学のウェブサイト上にある「龍谷大学大学院実践真宗学研究科実践真宗学専攻（修士課程）の設置の趣旨」という文書には実践真宗学研究科と文学研究科真宗学専攻とは鳥の両翼、車の両輪にたとえられるものの、その教育目標が異なるとし、その上で、実践真宗学研究科の目的を、

現代の様々な問題に対応できる実践力の養成である。そのため、この研究科では、各分野において卓出した研究業績・教育実績及び高度な実務経験を有する教育・研究者による実習指導をも含めた研究指導を行うことで精深な学識を教授する。これにより、現代の諸問題に対して多角的・複眼的な視点を備え、また、コミュニケーション能力や、異なる意見の調整能力等をも合わせ持つ専門的実践者ならびに宗教的実践の研究者を育成することを基本的な目的とするものである。

とする。また同文書には「社会に求められる宗教的実践者に相応しい高度専門的な素養の修得を図ることを目的とする」とあり、同研究科が臨床宗教師研修に接触を求めるのは必然的であったといえよう。鍋島直樹龍谷大学教授はこうした経緯を東北大学実践宗教学寄附講座のニュースレターにしたためている（鍋島2014; 2-3）。それによると東北大学側より「臨床宗教師」を全国で養成してほしいとの要望があり、龍谷大学は関係者を特別講義やシンポジウム等に招聘し、また鍋島教授自身が第4回臨床宗教師研修に参加をして認識を深めていったという。その結果、

2014年4月から龍谷大学大学院臨床宗教師研修を開設するに至った。

同研修は東北大学の講座と目標を同じくし、①傾聴とスピリチュアルケアの能力向上、②宗教間対話、宗教協力の能力向上、③自らの死生観と人生観を養う、④宗教者以外の諸機関との連携方法を学ぶ、⑤幅広い宗教的ケアの提供方法を学ぶの5点の習得を目指し、具体的には以下の科目群を置いている。

そして第5回臨床宗教師研修には11名の大学院生が参加した。参加者の一人の田中至道氏は「人生で初めて行脚という体験をしまして、被災者の方々からの眼差しや、手を合わせる姿を目にしたときに、本当に宗教者が求められている可能性というものを強く感じまして（略）臨床宗教師として自覚してやっていかないといけないんだという思いを同時に持ちました」（『東北大学実践宗教学寄附講座ニュースレター』6、2014）と述べている。

表2 龍谷大学大学院臨床宗教師研修

(1) 必修科目（科目名と単位数と開講年次）以下の5科目10単位を修得			
臨床宗教師実習	通年集中2単位	実践真宗学研究	半期2単位
グリーフケア論研究	半期2単位	真宗教義学研究	半期2単位
ビハーラ活動論研究	半期2単位		
(2) 選択必修科目（推奨科目）2科目4単位以上を修得			
現代宗教論研究	半期2単位	人権・平和論研究	半期2単位
宗教心理学研究 （宗教者間対話）	半期2単位	カウンセリング論 研究	半期2単位
宗教教育学研究	半期2単位	地域活動論研究	半期2単位
真宗人間論研究	半期2単位	臨床心理学研究	半期2単位
生命倫理論研究	半期2単位	精神保健学研究	半期2単位

## (2) 高野山大学

高野山大学が臨床宗教師の育成に取り組む背景には同大学および高野山真言宗のスピリチュアルケアへの関わりを無視することができない。

高野山大学がスピリチュアルケア学科を開設したのは2006年である。それに先だって高野山真言宗社会福祉委員会では、社会活動の一環として、ひきこもり対策に取り組み、そうした生徒の受け入れを高野山高校で開始、その指導・援助者の養成がきっかけでスタッフ養成が始まったという。そして「日本的なスピリチュアルケアとは何かを考え、現代の医療や福祉の場面で活動できる臨床的僧侶の役割を注視し、スピリチュアルケアの専門的理論と実践講習を企画、実習することとし」（大下大圓2003; 35）、2002年高野山真言宗のスピリチュアルケア・ワーカー養成講習会が発足した。こうした経緯があつて高野山大学に、仏教の教えをもとに、人間の心理と行動に関する専門的知識と実践的技能の修得を通して、医療・福祉・教育等の分野における「いのち」に関わる諸問題に対応できる人材の育成を目的として、スピリチュアルケア学科が開設された。しかし同学科は志願者が思うように集まらず、2010年度に学生募集を停止することとなった。

表3 高野山大学別科スピリチュアルケアコース

基礎科目（7科目選択）半期2単位	実習科目（4科目選択）通年2単位
グリーンケア	グループスーパービジョン
高野山の宗教文化	個人スーパービジョン
こころのケアとは	コミュニケーション訓練
終末期医療看護	スピリチュアルケア訓練
心理学と密教の深層心理	マインドフルネス
スピリチュアルケア援助論	臨床心理学テスト
スピリチュアルケア概論	<b>関連科目（4科目選択）半期2単位</b>
対人援助の方法と実際	災害時の心のケア
仏教心理学と事例検討	死生観
臨床心理学援助論	聖地巡礼
	密教瞑想
	メンタルヘルス
	もの語りの心理学

ただ大学としてスピリチュアルケアから撤退した訳ではなく、その後も密教学科の1学科体制の中で密教学領域と人文学領域とスピリチュアルケア領域の3領域を設けて、仏教とスピリチュアルケアとの融合が模索された。そして2014年4月、スピリチュアルケアを苦しみの渦中にある人々に寄り添い、共感的に見守る環境を提供することであると捉え、仏教を背景として自他の「いのちの営み」のために自己をいかすことのできる知恵と技を身につけることを目標に、別科スピリチュアルケアコース（定員30名、修業年数2年）を開設した。科目は表3の通りであり、会場は大阪大学中之島センター内の高野山大学大阪サテライトキャンパスである（高野山大学入学願書受付係編2014）。

表4 高野山大学大学院臨床宗教教養講座

科目名	学修時間	科目名	学修時間
ガイドダンス・グループ編成	10	宗教間対話実習	60
スピリチュアルケア概論	20	高齢者福祉実習	40
仏教学	30	死生学①	30
密教学	30	死生学②	30
仏教芸術学演習 (仏画・マンダラ制作)	30	生命倫理学①	30
密教学演習（臨床瞑想法）	30	生命倫理学②	30
宗教学	30	宗教心理学	30
宗教人類学	30	スピリチュアルケア学	30
宗教間対話	30	スピリチュアルケア学 (グループ演習)	30
臨床心理学①	30	臨床宗教学実習Ⅰ	60
臨床心理学②	30	臨床宗教学実習Ⅱ	60
社会福祉学	30	臨床宗教学実習指導Ⅰ・Ⅱ	30
相談心理学	30		

高野山大学スピリチュアルケア学科の立ち上げに関わった大下大圓教

授<sup>④</sup>は、スピリチュアルケアコースは大阪の街中に会場があることもあって受講者も集まり、そのうち約半数は宗教者だという。同時に高野山大学は宗教性を押し出した、つまり仏教者向けの高野山大学大学院臨床宗教師教養講座を2015年4月より東京で開設することを決定し、東北大学臨床宗教師研修を参考にしつつ、現段階（2014年末）で表4のようなカリキュラムが整えられつつある。スピリチュアルケア・ワーカー養成講習会から10年余りの年月が経ち、今後、東北大学と連携を模索しながら講座を展開していくことになるという。なお、多くの講義の学修時間は30時間だが、これは45分を1時間と考える大学特有の単位制（1単位45時間の学修）の時間配分で、90分の授業を15回受けて30時間の学修と考え、これに60時間の予習復習がともなって合計90時間の学修とみなし2単位を与えるものである。

### 3. 鶴見大学の取り組み

#### (1) 臨床宗教師育成事業のきっかけ

神奈川県横浜市鶴見区にある鶴見大学は、隣接する曹洞宗総本山總持寺によって設立された大学で歯学部と文学部を擁する。鶴見大学の臨床宗教師との関連は歯学部と先制医療研究センターを窓口とし、縁遠いように見える医学教育と僧堂教育との接合が模索されているところが特徴的である。

鶴見大学前田伸子副学長<sup>⑤</sup>によると、同大学では歯学部も仏教と無関係ではなく、かつては朝礼が必修としてあったといい、今も一年次より一般教養科目に宗教学が配置され、新入生本山一泊参禅会や解剖献体精霊供養法会といった宗教行事が組み込まれている。もっとも宗門子弟は全学で一桁であり、鶴見大学がこうした独自の路線に踏み切るのは木村清孝学長（2014年3月退任）・前田伸子副学長のもと、私立の歯学部として建学の精神を打ち出し、總持寺との連携を模索したことがきっかけだったという。そして東日本大震災を期に終末期医療と宗教との関係に

についての議論が開始され、2012年には同大学仏教文化研究所とグリーンケア研究会が協力して公開シンポジウム「死の痛みを超えて～大悲の禅に学ぶ～」(6月9日)が開催された。2013年には大学創立50周年と鶴見大学短期大学部創立60周年に合わせて、先制医療研究センターが公開シンポジウム「終末期の医療と宗教の協働化に向けて」(11月9日)を開催し、緩和医療やグリーンケアと宗教との役割についての追究の方向性が明確にされた。

このシンポジウムにシンポジストの一人として登壇したのが東北大学の鈴木岩弓教授であり、これを縁に2014年3月4日・5日に大正大学で開催された第二回臨床宗教師フォローアップ研修で、鶴見大学先制医療研究センターが協賛団体に名を連ね、2014年度より總持寺の協働事業として「終末期医療を支援する臨床宗教師の育成事業」が始まった。ただ前述の龍谷大学や高野山大学と異なるのは大学の宗門子弟が対象ではなく、總持寺の修行僧の僧堂教育と歯学部教育との接合が目指されることになった。

## (2) プログラム内容

大学からの提案は、修行僧の夕方の自己研鑽の時間を利用して、コミュニケーションを学ぶ研修を実施するという内容で、總持寺からは快諾された。ではなぜコミュニケーションなのだろうか。

そもそも2001年に文科省が医学部・歯学部が準拠すべきコアカリキュラムを策定し、その基本事項の中に「コミュニケーション」があった。そこでは「コミュニケーションの方法と技能(言語的と非言語的)を説明し、コミュニケーションが態度あるいは行動に及ぼす影響を概説できる」と「コミュニケーションを通じて良好な人間関係を築くことができる」が到達目標とされ、各大学ともそれに見合ったプログラム作りを行ったという。鶴見大学では上智大学カウンセリング研究所でカウンセラー研究課程を修了し、東京医科歯科大学を経て、現在は鶴見大学の中村千賀子非常勤講師が、これを担当し、臨床宗教師の育成事業にも引き続き関わることとなった。なお前田伸子副学長も上智大学カウンセリング

研究所での研修を受講し、中村講師とはそこで知己を得たという。

歯学部ではコミュニケーションの演習は3日間のインテンシブな研修を行うが、總持寺の修行僧にはそうした時間もとれず、一ヶ月に数回、各90分の時間内で行える内容となっている。具体的には表5であり、傾聴の基本を学ぶことを当面の目標にするという。

表5 終末期医療を支援する臨床宗教師の育成事業

1. オリエンテーション	8. コミュニケーションの基礎3 b 「観察とフィードバック2」
2. コミュニケーションの基礎1 a 「自己紹介」演習	9. 社会と繋がる仏教：講演2
3. コミュニケーションの基礎1 b 「自己紹介」	10. コミュニケーションの基礎4 a 「観察とフィードバック1」
4. コミュニケーションの基礎2 a 「話すこと・聞くこと」	11. コミュニケーションの基礎4 b 「観察とフィードバック2」
5. コミュニケーションの基礎2 b 「話すこと・聞くこと」	12. 社会と繋がる仏教：講演3
6. 社会と繋がる仏教：講演1	13. 研修を終えて：まとめ1
7. コミュニケーションの基礎3 a 「観察とフィードバック1」	14. 研修を終えて：まとめ2

### (3) 事業の課題

#### ①プログラムの戸惑いと手応え

總持寺には約150名の修行僧がいる。全員参加で臨床宗教師事業の説明会を行い、26名の受講希望者があった。全員が大学を卒業して修行を始め、三分の二は1年目であるという。出身は全国におよんでいる。受講者の中には戸惑いの声もあるようで、例えば只管打坐を原則とする修行生活をおくりつつ、研修中はフィードバック等で「語る」ことが不可欠になる。また先輩・後輩の壁を取り払ってのワークにも馴れないものがあつたようである。しかしスタッフ側からすると、受講者の態度は非

常によく、毎回課題となるリアクションペーパーには多くの言葉が書き連ねられ、前田副学長の言葉によると「もの凄く深いところまで到達しているのがわかる。むしろスタッフが学ばさせていただいている」という。また受講者の中には、受講をきっかけに大学院に進学を志すなど自分の人生に対する内省が進み、「居場所を見つけてみたい」というニーズに本研修が応えていることも前田副学長の指摘するところである。

## ②次年度以降のプログラム

同事業の2015年度以降の方向性には次の3通りを組み合わせたことが想定できるという。まず2014年度と同じプログラムを実施。その際には大学側からの受講生募集もありうる。次に東北大学の臨床宗教師講座につなぐ工夫やこれを範に自前のプログラムを策定するということも考えられるという。さらに何らかの医療関係施設と提携し、受講生に実習を施すことも計画している。すでに横浜近辺在住の臨床宗教師研修終了者とはそのことで協議も重ねている。總持寺の修行僧といえども一定期間の修行が終わると表に出ることができ、実習に従事することも可能なのだ。

## ③今後の課題

宗門子弟がほとんどいない歯学部や先制医療研究センターというセクションの医学教育と僧堂教育との協働はそう簡単でないことは想像に難くない。大学側、本山側双方に理解者を見つけることが重要だという。本山側にもカウンセリングなどの科学的手法に期待を寄せる風潮があり、また大学にも仏教に関心を持つ向きがあった。そして奇しくも18歳人口減少で大学側の対応策の一つに建学の精神を押し出しているのアピールが構想され、また本山側も近年叫ばれている寺院離れや葬儀離れに対する危機感が社会とつながる途に目を啓かせ、両者が結びついたところに、臨床宗教師事業が誕生したと見ていいだろう。前田副学長は、本山にも大学にも「どこかで流れをかえたいという機運」があったことと「巡り合わせ」を強調していた。

## 4. 「臨床宗教師」運動の拡がりに向けて

これまで東北大学の臨床宗教研修の中心に展開している龍谷大学、高野山大学、鶴見大学の研修・講座・事業の内容を見てきた。こうした動向は今後も拡大していくと考えられる。例えば種智院大学では、2015年度より臨床密教センターを開設する。密教の教えをもとに社会の諸問題に向き合い、その解決策を探るとともに、結果を広く社会に還元することが設立の理念だといいい、活動内容の一つに臨床宗教師の養成があり、東北大学の臨床宗教研修に準じた内容になるとされる(『中外日報』2014年12月19日)。同時に大学によっては臨床宗教師研修を検討しつつも躊躇いがあるのも事実である。そこに立ちはだかる壁(課題)とは何であり、それをどう突破・乗り越えていくのかをこれまでの事例から考えて、まとめにかえたい。

### (1) 教学と実践の間にある壁

宗教系大学が臨床宗教師研修を行う、または既存の研修と連携をはかろうとする際に、最初の障壁は教学と実践との間にある壁である。研究と教育に加え、社会貢献が昨今の大学の使命とされるが、三者は対等ではなく、大学において社会貢献のような実践は、受験志願者確保や対外的アピールの際に声高に叫ばれることがあっても、大学内でのステータスは決して高くない。宗教者として地域に根ざした活動をしている教員が多いとか、公益性を有する宗教教団とのつながりがあるからといって、宗教系大学が無条件に学外の宗教的な社会実践とは結びつくことはない。大学内の子弟教育においては教学を学ぶことが第一義であり、その専門性は高く、実践についての関心は低い<sup>(6)</sup>。教学と実践の間を領域的にも人的にも往復できる、あるいは双方で使われるジャーゴンを翻訳できる力のあるキーパーソンが存在が求められ、そこにはさらに「巡り合わせ」(前田副学長)のような出会いが必要となってくる。あるいはそうしたキーパーソンのリーダーシップが重要になってくるともいえよう。

## (2) 受験者確保という壁

宗教系大学が臨床宗教師研修に乗り出すには、錯綜した思惑がある。表向きは地域連携であり、社会貢献であり、建学の精神の発露であるが、それとは別に社会へのアピール、つまり受験志願者の確保がある。たとえ志願者の多寡にかかわらず研修を維持するという矜持があっても、大学の経営としても、第三者の評価としても、それが許されない事情が立ち現れることは、先に高野山大学のスピリチュアルケア学科の事例で確認した。そもそも受験志願者の多くが高校新卒であるという日本の特殊性や社会経験のない18歳が臨床宗教師に関心を寄せるということは稀であることに鑑みると、通常の受験体制のもとで志願者確保の壁は極めて高い。死や病いといった人生経験や宗教者としての挫折等を経ない限り、臨床宗教師への道筋があるからといって、その大学を選ぶことは少ないと思われる。その意味で鶴見大学の研修に一定の手応えがあったのは、受講者が大学を出て、ある程度歳を重ねているという事情に起因するのかもしれない。臨床宗教師研修を擁する学科や専攻に安定した志願者を確保することは必須であり、そのためには社会人入学、夜学・週末講義の開講、宗教教団からの派遣、志ある在俗者が宗教者になる可能性の確保など、さまざま方策を試みないといけない。

## (3) 標準化の壁

臨床宗教師研修の多くは自らの属する教団内で小さくまとまるのではなく、相手の信仰や宗派教派を超えた通宗教的営みが念頭に置かれている。スピリチュアルケアが宗教的ケアと区別されるなら、臨床宗教師の活動はスピリチュアルケアに近いと言ってもいいだろう。しかし非制度的・個人的な性格を特徴とするスピリチュアリティを大学の外部とはいえ、大学のカリキュラムに関連させてプログラム化し、ばあいによっては評価することは可能だろうか。鈴木大拙が「霊性とは宗教意識と言ってよい」「一般に解している宗教は、制度化したもので、個人的宗教経験を土台にして、その上に集団意識的ワークを加えたものである。(略) 宗教的思想、宗教的儀礼、宗教秩序、宗教的情念の表象などというものがあ

っても、それらは必ずしも宗教経験それ自体ではない。霊性はこの自体と関連している」(鈴木1972; 17, 19-20) というように、本来、スピリチュアリティとは、例えばどの教団や大学からでもアクセス可能な、そうした標準化されたカリキュラムとは無縁な、個性性にこそ、制度や儀礼や教義に絡め取られない豊かさがあるのだろう(弓山2007; 186-187)。

しかし個別のスピリチュアリティの豊かさは、標準化と個別化との間の往復運動によって、より増していくと思われる。具体的には標準化されたマニュアルでは伝えきれない自身の信仰の個性性に気付いたり、逆に自らの信仰の個性性をどう相手の信仰や価値観のコードに変換させる、その可能性／不可能性を吟味したりするトレーニングこそ、生きたことばを臨床の現場で有効に作用させるものである。逆にいうと、こうしたトレーニングなしに、自らの信仰の個性性は伝わらないし、標準化されたマニュアルだけではことばは上滑りし、問題にアプローチすることはできないと考えられよう。

以上、宗教系大学が臨床宗教師研修とどう連携するかという視点から、その障壁について整理してきた。もちろん現行の臨床宗教師研修が完成形ではなく、そのことは当事者自身が理解している。大下大圓教授は研修修了者の臨床現場でのマナーや姿勢について厳しい見方をしており、一層のトレーニングの必要性をとなえている。具体的には病院におけるコンプライアンスの理解や服装や傾聴のマナーをあげ、「現場での細かい配慮ができるコミュニケーションの資質や感性が重要で、知識だけの臨床宗教師はかえって全体の評判を落としてしまう」と危惧を述べる。

ただ宗教系大学が子弟教育の活路を何らかの実践性に見出そうとする時、「臨床宗教師」運動は最良のパートナーとなるだろう。そして宗教系大学として、そこには越えなければならないいくつもの壁があるのも、これまで見た通りである。これを越えようとする宗教系大学の不断の努力と、さらには人気のないプログラムやコースは瞬く間に廃止される大学内外の競争原理に抗して、10年、20年と腰を据えた人づくりと社会貢献の高い意識が必要となるのは間違いない。

## 参考文献

- 大下大圓2003「現代医療福祉現場への密教福祉の導入—スピリチュアルケアワーカー養成講習の目指すもの」、『密教学会報』41
- 大下大圓編 2014『実践的スピリチュアルケア』日本看護協会出版会
- 高野山大学入学願書受付係編・刊2014『別科スピリチュアルケアコース概要』
- 鈴木岩弓2014「閉会の辞」、心の相談室編・刊『故岡部健先生追悼緊急シンポジウム報告集』
- 鈴木大拙1972『日本の靈性』岩波文庫
- 全国青少年教化協議会・臨床仏教研究所編2013『「臨床仏教」入門』白馬社
- 高橋原2014「心の相談室」の活動と臨床宗教師構想」、『宗教と現代がわかる本 2014』平凡社
- 鍋島直樹2014「龍谷大学大学院「臨床宗教師研修」を始めるにあたって」、『東北大学実践宗教学寄附講座ニュースレター』5
- 弓山達也2007「スピリチュアリティを育み伝える」、同責任編集『現代における宗教者の育成』大正大学出版会
- 弓山達也2013「宗教系大学の社会貢献とスピリチュアリティの教育」、聖心女子大学キリスト教文化研究所編『宗教なしで教育はできるのか』春秋社
- 「龍谷大学大学院実践真宗学研究科実践真宗学専攻（修士課程）の設置の趣旨」（[http://www.ryukoku.ac.jp/about/outline/info\\_disclosure/images/jissen.pdf](http://www.ryukoku.ac.jp/about/outline/info_disclosure/images/jissen.pdf)）

## 注

- 
- (1) スピリチュアルケアを学べる大学やNPOまで含めると、さらにその幅は広がる。具体的なリストは大下大圓編2014の巻末資料に詳しい。
  - (2) 内容は全国青少年教化協議会・臨床仏教研究所編2013に収録。
  - (3) 2014年10月7日取材。
  - (4) 2014年11月6日取材。

- 
- (5) 以下の経緯は2014年10月17日にお聞きしたお話をもとに構成されている。
- (6) 同じことは比較的社会的実践につながりやすい保健・医療・福祉・教育といったヒューマンサービスの分野にもあり、筆者は勤務する大学の地域連携・社会貢献の部署の主任をつとめていた経験から、ヒューマンサービスといえども専門性が障壁となって協働して学外の活動にあたれないという経験を述べたことがある（弓山2013; 245-246）。